

嘉興と湖州との佛蹟

— 靈峰より雲棲へ(上) —

稻葉圓成

はしがき

丁度昨年の今月今日である。私は曾良乗といふ一人の支那人を伴れて上海を出て第三次の旅途についての實はこの寒季は廣東巡禮をする豫定であつたが、陳孫の戦亂の爲に廣東までは行けるが、それから奥への旅行は不可能であるといふことを、廣東歸來の邦人から聞いたので、其の方の旅行は出来ないことになつた。さればさて、寒さが厳しいのミ減水期の爲に長江上流地方へ出かけるにはまだ少し早いといふので、豫てから是非巡禮を試みたいと念じて居つた藕益智旭の終焉の地たる靈峰詣でを此機會に決行せんことを企てたのである。靈峰といふ山は處々にあつてここが智旭のそれかといふことがハッキリ自分には調べがついて居なかつた。それで杭州へ行つた時にはもしやと思つてその靈峰寺を訪ねたが、勿論それ

佛敎の影響より見たる萬葉集以後、今古集に至る和歌

ではなかつた。奉化縣の岳林寺の祖堂に傳天台正宗靈峰第何世と名乗る僧の數々あるのを見て、その住僧に靈峰を聞き糺すに寧波だといふ。丁度通譯の支那人が寧波人であつたから、それにその話をするに靈峰といふは阿育王寺から三四十支里の奥にあつて寧波からも滌山の人が參詣に行く有名な靈場である。或はそこでないかと思つて寧波へ行つた時に、諦閑和尚にその話をするにそれは道敎の靈場で、智旭の靈峰は孝豐縣にあると敎へてくれたから、始めて靈峰の所在地が確められた。それで上海からその靈峰へ行くには二つの進路がある。一は蘇州から小蒸汽船で湖州へ行くのミ、今一は嘉興から同じく小蒸汽船で湖州へ出るのである。孝豐縣は湖州から百七十支里西南にある。孰れよりするも略ほ同じ時日を要する。そして蘇州も嘉興も共に佛敎史跡の見るべきものが多いが、蘇州は曾遊の地であるから、嘉

興よりするこゝし、歸路は杭州に出で雲棲に遊んで株宏の芳蹟を探り、明末の二明星を偲びたい念じつつ、晴れては居たが寒いく、一月二十七日の朝八時さいふに上海北站發の杭州行の列車中の人みなつたのである。(大正十三、一、一二七記)

嘉興の佛蹟

—宋朝華嚴宗の淵藪と長水子濬の遺蹟—

嘉興は春秋の時に長水さいひ、宋には嘉禾さいいつたこゝもある。運河でこり圍まれた水郷で、上海と杭州との中央で、蘇州湖州へも毎日輪船(小蒸汽船)が出る交通の要路である。滬杭線や滬甯線の鐵道が布かれた今日でも客専用の定期輪船が出るのである。こゝで私の探らうとしたのは、宋朝華嚴宗の中興の祖である長水子濬の遺蹟。天下華嚴の五山の二さいいはれた東塔寺・嘉興大藏經の名で知られる楞嚴寺・長水子濬の跡ではないかと思はれる長水塔院のあつたさいいはれる眞如寺天台講寺の巨刹であつた精嚴寺等の諸刹である。そして杭州會遊の往返に列車から目に立つ古色を帯んだ寶塔の二つ三つがこの街の外れに點在するのが、私の脚を此の街へ引きつけた有力な動機であつた。上海からの列車は僅かに二時間半でこゝへ着く。停車場を出る

こ例の俵夫の群に惱まされる外に、十六七の若い而し汚ない娘子や男子がうるさく附いてくる。これは民船に乗れさいふ船頭の客引である。この邊では流石水郷だけあつて、女船頭の客舟が多い。停車場を出てから間もない城外の寶和客棧さいふうす汚ない旅館に室を取つて腰を下す。粗造な建物でガラス窓のスキから寒い風が用捨なく吹き込んで寒いこゝ夥しい。しかし田舎のこゝゝて煖爐は勿論、日本流の火鉢一つない光線の通らぬ客室は寒さが一入身に沁みる。こも角も寒さ凌ぎにもさいふので支那麵をこつて腹をこしらへ、俵を雇つて城内に出かけた。先づ精嚴寺を訪ねた。寺域はながく、新しい天王殿の兩側には鐘鼓の二樓があり、大雄殿も客室もかなり大きい。折柄住持が町へ念經(讀經)に行つて不在で鍵がないから大雄殿さへも入るこゝが出来ない。止むを得ないから再訪を約して寺を辭去した。次の日の朝再びこゝを訪ふて住持にもあつて隈なく漁つたが、何等の獲物もない。清末咸豐の長髮賊の亂にすつかり焼かれて了つた爲に、古いものは全く一物をも止めない。地誌にかいてある寺の寶物は全然散佚して影だも存して居ない。これは此寺ばかりではなく、嘉興で訪ねた寺さいふ寺は皆さうであつた。否な嘉興ばかりではない。江南湖廣に亘つ

てこの粵匪の災厄を蒙らない寺は十に一もない。甚しいのなるこ、咸豐の年に燒打ちせられたまゝに、取片附けもせずに自然の朽廢に委してあり、こても見るに忍びないものも尠くない。長髮賊がいかに佛寺や道觀や祠廟やの破壊に毒手を振つたかを偲ばしむる。實際南方に佛教史料の甚だ乏しいのはその一半の原因はこの粵匪の難に嫁しても差支なからう。この精嚴寺の如きはその後曲りなりにも寺觀の型だけでも具へたのはまだよくよい方である。この寺の東北隅に嘉興佛學研究會の講堂があり、その前には中國濟生會がある。いづれも昔の寺域内である。佛學研究會は此地方の有智識階級の人々の集りて、近頃擡頭しかけた佛教復興運動の一きざしで、各地に同じ名の會合が催されて居る。此に訪ふたがその例會の日だけはこゝへ集つて來るのだが平生は誰れも居らぬこゝで門が固く鎖されて居た。中國濟生會は施療施藥事業であるが、こゝには醫員らしい者が住つて居り、藥品が少しばかり棚には置いてあつた。この濟生會の入口には藏經閣といふ扁額がかけてあるばかりでない龍藏をも藏してある。勿論寺のもので濟生會は借家住居をして居るのである。

この城内で見た處は城隍廟・楞嚴寺・祥符寺・水西寺・

嘉興と湖州との佛蹟

天寧寺である。城隍廟も荒れ果て、小供大供の遊び場賭博場となつて居る。昔しあつたさいふ唐開元の鐘の影もない。その裏手に楞嚴寺がある。勅賜龍藏の額を掲げた牌門を入るこぢきに今新築中の天王殿である。大雄殿の本尊釋迦如來は明の銅鑄であるといふので寺僧が自慢して拜ませくれた。金箔で塗つてあるから説明を聞かぬも銅佛たるこゝは知れぬ。さう聞いて見ると明朝らしい面影は拜まるゝが凡作である。庫房で住持の玉峰和尚に嘉興藏のこゝを聞いて見たが何にも知らぬ。たゞ紫栢真可が曾て此に住して居たといふこゝだけは流石に知つて居た。尤も嘉興藏といつても此處に板木があつたのではなくて、徑山に板木があつて、摺つたお經を此處で頒布したのである。紫栢真可の骨折でその方冊藏經が私板として官板の南北二藏の外に明代に出來たのはいふまでもないこゝである。私は前に徑山に訪ねてこの板木の有無を糺したが遂に要領を得なかつた。後に『杭州志』を見るに板木は徑山の山上にあるのではなくて山麓の化成寺にあるといふこゝを書いてある。その化成寺のある部落は轎で通つたのであるが、それを調べ得なかつたのは残念であつたが仕方かない。せめてこゝでは開板當時の摺本でも得られらばこゝ志したこゝも全く空頼になつて了つた。祥符

寺。水西寺は城の西南隅にあつて、府學監獄署の間にある。この二寺の荒廢はまた一入でたゞ寺の名殘を留めて居るに過ぎない。長髮賊前の水西寺の佛殿の石柱や石礎だけが今も昔のまゝに畑の中に殘骸を横へて居るのはいかにも哀れ深い。その石柱の間に元至治元年の嘉興路資聖福寺長生修造局記の碑がある。本覺禪寺住持佛鑑禪寺の撰文で、その當時の圓鑑禪師の建立にかゝるものである。これが嘉興で見た金石の中で最古のものである。祥符寺は元代には佛祖通載の記者たる念常が住した寺であるが、今はたゞ一小門ミ小やかな佛殿ミを殘すのみで全く敗殘の極に達して居る。天寧寺は楞嚴寺の東北にあるが、こゝも今は一小菴で何等古を温ぬべきものはない。東塔寺は東門外四支里の東にある。今の停車場のすぐ東に當る。上海行の列車が嘉興驛を東へ出るミすぐ右手に見える立派な塔が卽この寺である。門壁に募化重修功德無量ミ大書した小門を入つて北へ進むミ約半町で更に小門がある。この門の右の川の中に數本の石柱が空しく立つて居るのは昔の鐘樓で景龍樓の遺址である。南宋の孝宗帝がこの樓に上り中段から誤つて墜ちたが、帝は泰然自若として取亂さなかつたミいふので名を知られて居る。寺傳ではこの寺は漢朱買臣の故宅で梁天監中に寺を建

て、隋仁壽辛酉に塔が建てられた。それは隋書に出て居る詔によつて江南五十三州に各一舍利塔を建てしめたその隨一であつた。中唐には清涼國師が此寺に駐錫したミこがあつて塔前に青白二池を鑿つたミいふことである。この二池は今も其址が遺つて居る。尤も今では半は瓦石で埋つて水も涸れ池ミいふよりは穴である。池側には斷碑が無殘にも狼藉ミして倒れ込んで居る。碑はすべて乾隆道光の間のもので古碑は一つもない。池の位置は小門を入るミ七層の立派な塔があるが、その後ミありて、今は殿堂はないが大雄殿のあつたミ思はるゝ礎石の前ミにある。寺僧に教へられて始めてこれが清涼所鑿の池であるミいふことを知つた程のものである。唐宋の間ミありて幾たびか變遷興廢があり寺額も度々改められ、宋政和の頃には一時神霄玉清萬壽觀ミいふ道觀になつて居つたミこもあつたが、紹興三十二年には再び佛寺ミ改めて東塔廣福教院ミいつた。此寺が面目を新め輪奐の美を鍾めたのはそれより二三十年の後宋淳熙の頃である。宋慶元六年に書かれた鮑義叔の寺記（嘉興府志十八）によれば、淳熙の初には寺屋も荒涼たるもので風雨を支へず魚鼓も響を罷め齋厨も空しく、院の西南に僅に廢塔二級が存して居つたミいふて居る。そしてこれを中興したのは寂照法師清雅であ

る。清雅の名は僧傳に見當らぬが、鮑義叔の記には師崑山人也純直 古于華嚴宗旨川流電激學者坐夏無慮千指ごあり、又『府志』には寧宗に召されて華嚴經を講じ紫衣及寂照の號を賜ひ、更に華嚴經閣及雷音海印二堂の御書をも賜はつたごあり、この寺を清雅住持の時に廣福賢首教院ご呼んで居つた。されば清雅は華嚴宗の僧で此處で華嚴宗の宗義を宏揚したのである。所が會昌法難以後華嚴宗を中與したのは宋朝の長水子濬ご晋水淨源である。長水子濬は長水即嘉興で華嚴宗再興の旗を擧げ、晋水がその門に入つて衣鉢を傳へたものご嘉興である。晋水は後ご、から一日行程の杭州慧因寺(高麗寺)を建て、そこに住し、高麗の義天がその門に入りこれを高麗に傳へたのは世間周知の事實であるが。これらの華嚴宗の祖師ごこの清雅ごの間にごんな關係があつたか、史實を缺いて全く知れないのは遺憾であるが、清雅の廣福寺を重建した淳熙十五年(西曆一一八八年)は子濬示寂の天聖八年を去る百五十八年後であり、淨源示寂の元祐三年を距るご正に一百年であるから、勿論面授の弟子ではない。しかし宋朝華嚴發祥の同じ地に百有餘年の後に同じ宗旨を宏揚したのであるから、其間に師資の系脈が存して居るのは想像するに難くはない。そはごまれ清雅以後この寺は幾

多の變遷を経て、明洪武の初には定めて東塔廣福華嚴教寺ごしたごいふごこで、永く華嚴宗の寺刹ごなつたのである。清雅以前のごこは前に叙べた清涼の青白二池ごいふ傳説が存して居るだけで明かでない。この池は明萬歷には青白池亭を重修したごあり、荒廢し切つた今日でも尙ほ寺僧がこの池のごこ、景龍樓の故事だけは此寺に遊ぶものに語るのを忘れないのから見ても此寺の跨りごして永く傳へられたものご見える。しかしこの池が果して清涼のものかごうか又清涼がごこに住したか否かごいふごこはこれだけの傳説では確めるごこは出来ない。この傳説はこの寺が華嚴の名刹ごなつて以後附會せられた事實であるかも知れない。そはごまれ、今日の東塔寺には、明代に重建したごいふ七層の塔ご、朱買臣の墓ご、形ばかりの大雄殿ご庫房ごが現存するのみである。大雄殿のある一角を取圍んで居る土塀に莊嚴法界ご大書してあるだけに、華嚴宗の古刹たる名残を留めて居る。寺僧一族で四五人の者が居るやうである。寺僧に華嚴宗の事を質ねても要領を得ない。然らば臨濟宗かごいへば然りごいふ。貴僧はごこで傳戒したかごいへば四川の峨眉山だご答ふ。此寺も咸豐の法難に塔を除いて外の殿堂はすっかり焼かれて了つたのである。たご寺域は廣壯で大部分は畠ご

なつて居るが、昔の巨利を偲ぶには充分である。こゝを一通り調査して驛前の旅館に引返したが、まだ日没には小二時間もあるので、舟を雇つて眞如寺に行く。船頭は三十前後の子持の婦人三十六七の娘との二人で折柄の寒い川風にもめけず巧に櫂をこいで、われら二人の客を七八清里もある城西の眞如寺へ送つてくれた。私が寒い日の而も日の下つた頃から此寺へ出向いたのは、はつきりせぬが眞如寺は長水子濬の道場であつたであらうといふ見當を附けて居つたから、それを確かめたい爲であつた。

眞如寺は東塔寺とは反對の方向で、嘉興の街の南西の外れの桑園の中に屹立して居る七層の塔のあるのがそれである。此處も亦長髮賊の爲にこの塔の外はずべて烏有となつて了つたから、塔前にあるあまり大きくない眞如寺の殿堂はその以後の建造にかゝるもので、考古的興味を満足せしむる何物も存しない。大雄殿には三尊を安置し其の前に五體の坐佛が祀つてあるの如何佛なりやと寺僧に問へば知らず。客室には四五の學生らしい男女の客が食卓を圍んで居る。町はづれの寂しい田舎の寺にこの冬枯に不相應な饗客と訝しさに堪へぬ。しかし都に近い寺觀が都人士の遊覽所となつて居るのは當に支那ばかりではない我邦でも同様である

が、殊に支那の寺院ではその弊が甚しいやうである。これら遊覽客の爲に特別に室や亭の設備をし、そこで飲食もせしめそこで賭博もなきしむるのである。それで暈酒が山門に入るこゝも珍らしくない。現に昨年春の上海新聞の廣告には佛教會の規約で堅く暈酒の山門に入るのを禁ずるこゝを公示して居た。飲食や賭博が行はれる時には必ずや女に關する犯罪が附物として存在するこゝも自然の勢であるが、支那の小説には男女の密會場所として寺觀が常に取扱れて居るのから見ても略察するこゝが出来る。私の旅行中にはさういふ狼はしい事實をつきこめたこゝはなかつたけれども、男女の客が寺を遊覽場所とする事實は幾度も見聞したのである。尤も一般的には今日の支那の寺院の内ではある程度まで嚴格に戒律が持たれて居つて、決して日本の寺院で見るやうな破戒が大ビラに行はれ、それが今日では普通の事として何人も咎めもしないといふ濫雜な事は決してない。日本に所謂梵妻なるものや、小供のオシメや、さては酒壺などは支那の寺院では到底見出されない。しかし寺院内では聖僧を裝つて居る支那の和尚も、寺域外では必ずしもさうでないといふこゝで、上海などには夥しい梵妻が居つてこれらの聖僧の性慾を満足せしめて居るこゝいふ話である。兩浙の巨

刹は大底上海に下院即支院を持つて居り、年に兩三度はその寺僧が交替で出て來るのであるから さういふ風説も強ち嘘ばかりではあるまい。話が横へそれたが眞如寺の客室に遊んで居つた若い男女の群が何人であるかは私の窺知し得る所ではないが、はからずも私は支那寺院の暗黒面の一部を見せ付けられたやうに思はれた。その客室の前に小さい一室があつて四五の位牌が祀つてある。其中に本寺地主裴宰相休公及男女公女太諸位神儀ごある一位があり、この寺の唐裴休捨宅の故事を物語つて居る。寺殿の後に高塔が聳えて居る。清乾隆年次に重建せられたもので東塔寺の塔よりは少しく大きい手法は拙劣で藝術的價値は遙に低い。その塔側に重建眞如寺塔増碑記と誌した一碑がある。康熙十三年の立石である。これを卒讀するにこの塔は宋朝に自南比丘の創建したもので仁王護國般若塔名名けた。寺は唐の孝宗の時裴休が清暉堂の故址を捨て、創建したもので、黄蘗や雪峰の大徳が錫を留めたが殊に雪峰が來て錫で地を掘つたらば甘露水が湧出したといふやうな此寺の歴史が誌されてをり、その次には長水が談經した時には花を雨して地に遍かつたといふことが書かれてある。この長水はいふまでもなく華嚴の祖師のそれである。して見るに『通志』に言ふ所の長水塔院は

即ち子潞の塔院であることは疑を容れぬ。後に『嘉興府志』を見るに長水塔亭あり元祐戊辰高麗僧統重修云々ありあれば、いよ／＼華嚴中興の祖の塔のあつたのは此寺であり、義天の塔院重修といふことも首肯される。私はこの塔記を讀んで私の豫想がいよ／＼確かにされたのに勢を得て、何かして長水塔院の所在をつきこめたいと念じ、更に寺に引返して寺僧に質ねるに、今日はこの寺の住持が不在であるからわからぬといつて要領を得ぬ。寺の周圍は一面の桑園で墓址らしいものはない。眞如寺の南數十歩にして一小菴があるので、それに入つて聞くに、眞如寺の所屬ではあるが長水塔院ではないといふ。その菴の東には大きい礎石の二三が畑の中に見えるのは長髮賊難前の天王殿の址であらう。その礎石の前には小さい門があつて石狗が置いてある。これが眞如寺の惣門で前には小川が流れて居る。この門から今の眞如寺の建物までは約一町もあり昔の巨刹たりしことを物語つて居る。薄暮漸く迫り且つ探し索める長水塔址は更に手がかりをも得られない。こも角も華嚴中興の道場を確め得たことに少なからぬ満足を得て歸路に就く。例の女船頭なか／＼に如才なく三塔寺に寄るから若干の増賃をくれさせがむ。言ふに任せ三塔寺に舟を着く。三塔寺は即茶禪寺にて寺前に三

塔併び立つ故名を得、今の三塔は咸豐法難後に重修せられたもので極めて新しく取り立て、いふ程のものではない。寺内へ入つて見るに、中央は釋尊で左は觀音であるが、右には養蠶の神といふ俗形の神像を案じてあり、その前にはいろいろの供物が供へてあつて、流行神である。此邊一帶の地は養蠶の本場で畑も見渡す限り桑園である。この土地にこの神の流行するのは當然である。この寺を出る頃は日はこつぷりくれて寒月が水郷を照して居つた。月下に舟を急がして宿へ歸つたのは夜の八時頃であつた。

湖州の佛蹟

—天寧寺の經幢と晚唐の飛英塔—

嘉興では二日間を費す豫定であつたが、故址多くは埋滅し殿堂は全く咸豐法難の犠牲となつてその創痕まだ癒えないので見るべきものが甚だ少ない。爲に一日を繰上げ二十八日の午前十時三十分開往の輪船で湖州に行く事とし、昨日見落した精嚴寺を再訪し、鴛鴦湖の煙雨樓に遊んで輪船に行く。此日天いよゝゝ寒く鴛湖の小鴨が寒さに泳ぎの自由を失つて居るのを見受けたる程であつた。輪船は豫定より一時間遅れて出帆、船は運河を北西へ進むのであるが、沿岸はどこまでも桑

園で殺風景なところは此上もない。夜九時に漸く湖州に着いて滙通旅館といふ新築の旅舎に入り、燂燂麥支那酒で腹を温めベッドに入つたが、すき間漏る風が寒いので、嘉興から同船して來た上海の藝人連が隣室で騒ぐのミで容易に眠に入れない。明けて二十九日は雪である。今日の午後四時にこゝを出る夜舟で梅溪に行き更に孝豐縣に轡を進めねばならぬ。孝豐縣は湖州から百七十支里で二日行程の位置にある。舟の出るまでに湖州城内の佛蹟を探らねばならぬ。雪の晴れるを待ち兼ねてまづ天寧寺に行く。寺は現に浙江第三中學校になつて居り、唯その外廓の壁に天寧萬壽禪寺と大書してその寺趾たることを知らしめて居る。門内へ入るに半は洋風の校舎が建て竝んで居るが、今の遊戯室になつて居る一堂は全く寺の建築そのまゝである。その境内に經幢が三基ありすべて唐代のものである。殊に面白いのは門衛所の裏手にあるものは石が完全して居るばかりでなく、經は龕勝陀羅尼であるか。

唐會昌三年歲在癸亥十月丙辰朔九日甲子樹建幢功
德主顯川陳榮 勾當寧化寺僧文觀 寺主僧令洪書
とあり。別に左の由來を刻してある。

會昌三年十月九日樹至會昌五年六月十七日准 勅廢
至大中元年十一月廿八日重建 專勾當軍事押衛陳歎

衛前虞侯吳允中 隨身沈德師 功德主陳榮建 大
都料陳德方重樹 李公亮 奉爲士 考妣永充供養
劉暹

これによるこ、會昌三年に樹てた碑を五年の法難で
一旦倒して置いたものを法禁の弛んだ大中元年に更に
建て直したもので、會昌の法難を物語る有力な史料で
ある。又一幢は門衛所の向ひ側の應接室の横手にある
これは幢の上部は破損して居るが下部の經刻の部分は
完全して居る。これは六種眞言で左の年次の奥書があ
る。

唐大中二年歲次在戊辰八月戊子朔廿一日戊申建 功
徳主施安 費亮 徐瑗 沈思悟 都勾當軍事押衛陳
馱 衛前虞侯吳允中 隨身沈德師 曹巨川書

これはその翌年の建立にかゝるもので、法難の反動に
よつて佛教が更に興つた事が察せらるゝ。當時の教界
があつた峻厳を極めた法難に對して尙ほ相當の反撥力を
持つて居たのである。尙ほ一經幢は少し奥へ入つた小
使室の裏にあるが、前の二幢に比するに石は稍小さく
下部が破損して居り充分に讀み下すこゝが出来ぬが、
唐咸通十年六月廿二日建石で馮卯正の書である。前の
二幢の拓本を取らうとしても、氣温があまり低いので
紙が石に凍てついてぎうしてもきれないから、小一時

嘉興と湖州との佛蹟

間の雪中の作業が徒勞に終つて了つた。此處から程近
い處に吳興圖書館がありその構内に四基の經幢と一個
の斷碣がある。其の中の二基は年次も讀め、一は尊勝
陀羅尼で唐會昌元年十一月立のものである。餘の二基
は磨滅して讀下し難い。『寰宇訪碑錄』には唐代の天寧
寺經幢として以上四基の外に大中十一年の尊勝陀羅尼
咸通四年の陀羅尼、及び無年月の尊勝陀羅尼二基を擧
げて居る。年次の讀み難い二基はその孰れかであらう
圖書館の構内の經幢は孰れも以前には天寧寺にあつた
ものを近年此へ移したものだといふことである。この
圖書館のすぐ裏手の雪空に高く聳え立つて居る塔が飛
英塔である。塔と引續きの地域に念佛寺といふ小さい
形ばかりの小菴があり一僧が堂内で切りに大鐘をかき
鳴らして居るのが哀れを催す。この小菴の前の空地に
は礎石が點々散在して一日寺址たることを示して居
るが、そこに一古碑がある。それが太原王勃の釋迦成
道記で

大宋元豐五年十月立石於湖州飛英浴院 管内都僧監
賜紫永洪 寺主賜紫清己 副寺主賜紫道純(以下略)
沙門元耀書である。その碑陰には荔溪沙門慈梵撰の宋
湖州飛英寺浴院記がある。熙寧元年二月十五日記の年

次があり。同勾當知浴講僧守愿 元載 無外 副寺主 講僧元晟 寺主持念大德文雅(以下略)の名が見えて居る。講僧さいひ持念大德さいひて、僧に敎禪の別稱を用ゐて居るのは珍すべきである。寺に講寺禪寺の別號のあることは普通であるが僧に別稱を用ゐるのは少ない。中に持念大德さいふのは恐らくは持名念佛者の謂であらう。浴院は僧徒の浴室であつて、是を以ても宋代の飛英寺がいかにか巨刹であつたかゝ知らるゝ。この小菴を去る約一丁に飛英塔があるが飛英寺は現存せぬ。飛英塔は七層の大きい木造の塔で、其中に五層の石造の舍利塔が藏めてある。塔前に天順七年歲次癸未五月初吉主上乘石塔院比丘道黻徒永堅孫文明立石の重修飛英舍利塔記の碑と。萬曆三十七年歲在己酉季秋吉且郡人韓紹撰の吳興重修飛英塔記の碑とが建つて居る前者は石塔の歴史、後者は木塔の緣由を誌して居る。これによるに唐咸通年中に僧雲皎なる者が長安から佛舍利七粒を得て歸り石塔を建て、これを藏めた。その工事は中和四年に始めて乾寧元年に竣功した。實に十一年間の日子を要した。此塔の絶頂から神光が現はれたといふので飛英塔との名を得た。萬曆の飛英塔記に飛英養取佛家舍利飛輪英光普現故名といつて居る。それより宋開寶年間になつて三十七層高六百五十尺とい

ふすばらしい大きな木塔を新に建て、石塔をその中に入れた。これが木塔の始である。所が紹興二十一年に雷火の爲に燒けて了つたので、端平の初年に更に七層三百餘尺の木塔を重修した。それから元の時代にも修繕したが明永樂年間に落雷の爲に木塔も石塔も共に破損した。そこで木塔は永樂の間に一新したが、石塔は工費が不足なので、塔石十二方石佛一千四十八尊靈山會一會の舊石を擧げて修覆が出来なかつた爲に石が缺け佛像が磨滅したりして原形を失ふやうになつたので、景泰壬申に僧道黻が發起して募縁に努め天順壬午に到りて漸く其工を竣へた。以上は天順の舍利塔記に誌す石塔の歴史である。木塔の方は永樂の後嘉靖にも重修し更に萬曆に一新したといふのである。それから以後の事は明瞭ではないが、今のものは手入はしたことがあつても大體は其の時のものであらう。若し明の塔記を全然信據するならば舍利石塔は幾度かの修補はあるにしても、大體の骨格は唐の乾寧元年(西紀八九四年)竣工のものといふべきである。木塔の中に入籠になつて居るから光線が充分に通じないので見難いのも且つはさういふ古美術の鑒賞眼を缺いて居る私には、それがハツキリ何時代のものであるかといふ的確な斷案を下すことは出来ないのは甚だ残念であるが、塔は

五層で各層には各六面より成りて最下層の前の一面に

は涅槃像、後の一面には靈山會の陽刻である、又中層の前後二面には扉が彫つてある。此に舍利を藏するのであらう。其他の各面には無数の佛像が彫刻してある大體の型式に於いて栖霞寺の石塔に似通つて居る點が多い。江南ではあの塔に次ぐの名塔であるが、從來あまり世の中に知られて居ないのは、湖州といふ片田舎にあるのミ一つは木塔の中に入れ佛になつて眼にた、ぬからでもあらう。塔前の明碑の拓本を得たいので榻本屋にこの石塔のいづれかに題銘でもないか聞いて見るに「ある」といふ。この石塔の年時に何等かの曙光を得らるゝであらうと早速其の榻本を依頼したが、此の寒い時季には榻本は困難であるから陽春の候までならばといふのに、幾分疑懼を懐きながらも、前に天籟寺で寒氣の爲に榻本の失敗を實驗した自分には、その言に従ふより外はなかつた。それで手附金までやつて堅く約束をして置いたが、三月の初旬に約に違はず、上海の知人の許へ託送してくれたので、前に疑懼を懐いた自分が恥しかつた。さてその題名といふのは即ちこれである。

報答四恩三有生身父母養育深恩仍乞懺悔罪瑕解釋窻
債莊嚴佛果成就菩提紹興二十四年甲戌四月八日□氏

嘉興と湖州との佛蹟

謹願(以上一行)

府郭南門界居住奉 佛女弟子□氏三五娘法名善德謹
施淨財壹伯貳拾貫文足鑄造 釋迦臥佛聖像一面所集
功德伏用(以上一行)

これによると宋紹興二十四年に成つたものであるとが明になるが、それは勿論「釋迦臥佛聖像一面」の彫刻の年時を指すものであつて全體の年次とはならぬ。そしてその釋迦臥佛一面といふのは恐らくは前面の涅槃像を指すものであらう。そして紹興二十四年といふ年次は丁度三十六層の木塔が雷火に焼けたといふ紹興二十年の後であるから、この時既に石塔の一部は破損したことが確められる。しかしそれは全然改修したのかさうかといふ疑問は依然として残つて居る。これらは専門的智識の所有者にもつと仔細に實物を檢尋して貰はねば最後の斷案は得られぬわけである。塔内は乞食の住家で食器や寢床の藁が散亂して居つて不潔なことは夥しい。その一隅の闇がりから唸り聲が聞えるので、氣味悪くゝのぞいて見るに一人の病乞食が寒苦にせめられて居る。この塔の前には美以土教會の十字塔が巍然として、棟瓦の落ちかけた飛英塔と對峙していかにも佛耶二教の盛衰を象徴して居るかのやうである。こゝから少し西へ行つた所に天聖寺がある。天王殿だ

けは破損はして居るが昔しのまゝのものが残つて居るが、大雄殿は後方の一堂を代用したものであらう。その間の空地は絹絲の撚掛工場になつて居り、僧の影も寺内には見えぬ。

午後四時に梅溪行の乗合の夜舟が出る。梅溪行の舟は午前二時午後二回の定期船が毎日出るが、午前の舟は晩方に梅溪へ着くが、梅溪には飯店の外に旅館がないから、さてもこの寒夜を過すことは出来まいから、寧ろ夜舟で行けば寒いには寒いが、夜が明けてから梅溪へ着くその足で孝豊縣まで行けばよいといふので、わざと夜舟にしたのである。乗客は満員で二十名程あるが、私共二人には足を延して寝れるだけの場處を特別に提供してくれたので、支那のお客と雜魚寝をするだけはせずにすんだ。が竹のアンペラのこま一枚の下でこの寒い一夜を川風冷たい中に明さねばならぬ。幸に天候は恢復して舟が湖州の城を出で、川幅の廣い處へ出た頃には、晃々たる寒月が照り互つて、沿岸の俚童が月下に興がる聲を聞きつゝ、いつの間にか眠に入つたか十一時頃には眠がさめて、寒さが毛布を透して襲つて来る。舟が時々氷を砕いて進むので、いよゝゝ寒さが骨に徹する。それでも船頭はこの霜夜の川風に凍えつゝ、もゆるやかに間斷なく爐をこいで居る。船頭に

呼び覺されて起き出る。正に赤い陽が東山から昇つた時であつたが、舟は厚い氷のはりつめた川岸について居り、雪のやうな霜が大地を覆ふて草も木も凍えて居る。こゝは荆灣といふ所で梅溪まではまだ十支里もあるが滅水の梅溪までは溯れぬからこゝへ着けるのださうでこゝで轎を賃して一路孝豊縣に向ふ。今日は一月三十日である。こゝから孝豊縣までは八十餘支里それから更に靈峰までは十五支里東北方の山中である。